

2011年7月26日（市長、教育長）

2011年7月27日（市議会議員）

2011年7月27日（知事、県議会議員）

那覇市長 翁長雄志 様
那覇市議会議員 金城 徹 様
那覇市教育委員会教育長 城間幹子 様
.....
沖縄県知事 仲井眞弘多 様
沖縄県議会議員 高峰善伸 様

DOCOMOMO Japan 代表

鈴木 博之

（青山学院大学教授、東京大学名誉教授）

旧沖縄少年会館（那覇市久茂地公民館）保存要望書

拝啓、時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

本会は、20世紀の建築遺産の価値を認め、その保存を訴えることを目的のひとつとする、世界54カ国が加盟している近代建築保存の非政府国際組織 DOCOMOMO（= Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of Modern Movement : モダン・ムーブメントに関わる建物と環境形成の記録調査および保存のための組織）の日本支部です。

今般、旧少年会館（那覇市久茂地公民館）の取り壊し計画が進められていると仄聞し、当会館を日本近代の重要な建築遺産と認識するところから、その保存について要望する次第です。

旧少年会館は、戦後復興期にあたる1966年に、沖縄のこどもの劣悪な教育環境を憂いた当時の教育関係者の尽力と、全国から想定を超えて集められた48万ドル（当時1億7千万円）の寄付金で、那覇市出身の建築家であり、横浜国立大学および東京大学大学院を修了し、沖縄において多くの建築設計に関わった宮里栄一氏の設計によって建設されました。この建物は、子どもの教育に関する公共建築としての社会的役割だけでなく、戦後沖縄の建設技術の発展を証言する近代化遺産でもあり、また沖縄が日本に復帰する前の近代建築の足跡を記録する大変貴重な文化遺産でもあります。現在すでに DOCOMOMO Japan では、

沖縄に存在する二つの建築物、聖クララ教会(1958年)、那覇市民会館(1970年)を選定し、本部に国際登録を行っております。旧少年会館の価値は、これらの建築物に匹敵する下記の点に集約でき、21世紀の日本の発展と興隆を思うとき、次代への継承が高く望まれる文化的・社会的価値を有しています。

老朽化および耐震性の問題があるとお聞きしましたが、建物が果たす機能的側面だけでなく、建築がもつさまざまな価値に目を向け、旧少年会館の建物を現在の建築技術を駆使して保存改修しながら、新たな再生・活用方法について御検討いただきたくお願い申し上げます。

(1) 沖縄の本土復帰前に建てられた貴重な文化遺産としての歴史的価値

旧少年会館は、第二次大戦によって本土以上に荒廃し文教施設等が不十分な沖縄において、青少年の健全な育成のために沖縄少年会館として、沖縄がまだ本土に復帰する前の1966年に、地元をはじめ全国からの多大な寄付金を集めることによって、建設されました。当時としては珍しく、プラネタリウムや鉄道模型のジオラマ展示、さらに離島の子どもたちのための宿泊施設を有する最新の科学館でありました。那覇市の街に建つ7階建ての鉄筋コンクリートの造形は、当時の沖縄の子どもたちに夢と希望と大きな感動を与えたと言われております。

一方、本土復帰前に建設され、新しい沖縄のアイデンティティを求め、その時代を生きる拠点となった、琉球政府の「立法院」、ペルー県人会から贈られた「子供博物館」、映画館の「国映館」などの近代建築が存在しておりましたが、何れも1990年以降、解体・撤去されております。このように、老朽化や経済性の論理のもと、本土復帰前の歴史的証人としての近代建築群が取り壊されるのは、建築が有する地域の文化や歴史を伝える重要な役目をないがしろにすることを意味しております。特にこの旧少年会館は、沖縄のアイデンティティを育てる少年会館として、子どもの教育に深く関わってきており、教育の草の根的な場として、極めて重要な存在だと考えられます。

(2) 那覇市における街並形成の存在

1920年代に欧米で誕生した新しい建築理論であるモダニズム思想に基づいた建築は、日本において東京、大阪などの大都市はいうにおよばず、地方都市においてもいち早く取り入れられ、現在の街並の基本的な骨格を形成しております。特に戦後多くの都市が荒廃したなかで、いかに合理的にまた美しく整った姿で街並を形成するかは、日本において重要な課題でもありました。旧少年会館は、まだアメリカの施政権下であった沖縄の地に、新しい沖縄のアイデンティティを象徴するために、東京文化会館などで試みられていた鉄筋コンクリート造の造形的特徴を活かし、人間の強い復興の意志が感じられるよう建設され、周辺の街並の形成に寄与してきました。鉄筋コンクリートの造形は一見、冷たい印象を持ちがちですが、時を経るに従い、しだいに周辺の風景にとけ込むという材質でもあります。

特に、沖縄では台風という風土性から、建築材料としてのコンクリートやブロックが、建築物に多く使われており、その造形が沖縄の街並形成に重要な役割を果たしているといえます。

(3) 戦後日本の鉄筋コンクリート造建築について、そのデザイン手法の展開を示す事例としての評価

上に述べましたように、コンクリートを建物の建設にいかに応用し、それに相応しいデザインを創案するかは、洋の東西を問わず近代建築の大きなテーマでした。旧少年会館は、沖縄で初めてのコンクリート打ち放しの建築で、建物の柔らかな印象を出すために曲線が使われておりますが、それは施工者による非常に高度な型枠技術などがあったことによるものであります。しかしながら、現在においては、施工上の問題が見られるのも事実であり、これは旧少年会館だけのことではなく、鉄筋コンクリート造の建築が有する問題であります。多くの同様の近代建築が、耐震性を含めて、そのような問題を解決し再生しております。最上階には大きな庇がついており、強い日射光を遮るとともに、沖縄という亜熱帯地域にある建築的特徴が表現されております。また、外観だけではなく、コンクリート構造によって、内部空間にも流れるような空間的特質が実現され、最上階にプラネタリウムやドーム型の天文台を設置するなど、沖縄におけるコンクリート構造および工法を伝える貴重な技術史的価値が存在していると考えます。

以上から、旧少年会館は、文化的意義と歴史的価値を有する貴重な遺産と考えられます。当会館の取り壊しは、戦後の沖縄における教育という文化形成と、景観という都市形成に寄与した近代建築が失われてしまうということになります。本会としましては、その点を特に憂慮する次第です。それは、結果的に建物の歴史的な価値を減じ、そこに託されていた環境と調和するモダニズム建築への手がかりを失い、戦後、本土復帰を目指し、沖縄のアイデンティティを大切にしてきた那覇市そして沖縄県の歴史にとっても将来への禍根を残すものになると考えます。

日本の近代の歴史を代表する、このかけがえのない建築遺産が後世に継承されますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。もし求められれば、本会は、この建物の保存・活用に際して、建築の専門家という立場から、助言をさせていただく所存であることを申し添えます。

敬 具